

称号及び氏名 博士（学術）王 崗

学位授与の日付 平成 17 年 3 月 31 日

論文名 「中国語母語話者による日本語従属節の習得に関する研究」

論文審査委員 主査 教授 野田 尚史  
副査 教授 山岡 實  
副査 教授 張 麟声

## 論文要旨

本研究は、中国語話者による日本語従属節の習得状況を考察することと、従来の第 2 言語習得の研究で十分な議論がなされていないところを明らかにすることを目的とする。本研究の主な構成は次のようになる。

第 1 章：本研究の目的と構成

第 2 章：日本語の従属節に関する従来の研究の概観

第 3 章：中国語話者による日本語従属節の習得に関する大学 3 年次生の調査

第 4 章：中国語話者による日本語従属節の習得に関する大学 4 年次生の調査

第 5 章：中国語話者による日本語従属節の習得にみられる中間言語の可変性

第 6 章：中国語話者による日本語従属節の習得に関わる要因

第 7 章：中国語話者による日本語従属節の習得にみられる言語転移

第 8 章：中国語話者による日本語従属節の習得における教室指導の役割

## 第9章：本研究の結論と今後の課題

本研究では、中国語話者による日本語従属節の習得状況の考察について、「～が」、「～から」、「～ので」、「～たら」、「～と」、「～てから」、「～あと（で）」、「～とき（に）」の8つの従属節の節末形式を選定し、主に次の3点から検討する。

- 1) 従属節の中の「は」と「が」
- 2) 従属節の述語のル形とタ形
- 3) 類義的従属節の節末形式間の使い分け

また、従来の第2言語習得の研究で十分な議論がなされていないところについて、主に、次の4点から検討する。

- 1) 中間言語の可変性
- 2) 学習者の習得に関わる要因
- 3) 言語転移
- 4) 教室指導の役割

これらの検討項目について、具体的には、次のように考察した。

第1章で本研究の目的と構成を述べ、第2章で日本語の従属節に関する従来の研究を概観したあと、第3章と第4章では、それぞれ、中国の大学3年次生と4年次生を対象に実施した調査を通して、中国語話者による日本語従属節の習得について考察した。この調査は、それぞれ、中国の3つの大学に在籍している日本語を主専攻にしている、3年次生に翻訳と2項選択の2つの課題を、4年次生に翻訳、2項選択、文法性判断という3つの課題を完成させる形で行った。その結果として、次のようなことがわかった。つまり、中国の大学3年次生でも4年次生でも、従属節の中の「は」と「が」、従属節の述語のル形とタ形、「～から」と「～ので」、「～たら」と「～と」、「～てから」と「～あと（で）」、「～たら」と「～てから」、「～たら」と「～とき（に）」という類義的従属節の節末形

式間の使い分けという3つの部分における習得があまり安定していないということである。

第5章では、中国語話者による日本語従属節の習得にみられる中間言語の可変性について考察した。従来の中間言語の可変性の研究では、同一の学習者グループによる中間言語の可変性は、同一形式の課題において発生しているという事例について報告しているものがわずかながらあるが、そこではその可変性を自由的可変性と捉えている。そこで、本研究では、中国語話者による日本語従属節の習得にみられる中間言語の可変性を考察した。その結果として、次のようなことがわかった。1つ目は、本研究で扱っている日本語の従属節に関するほとんどの検討項目において、中国語話者の間に、同一形式の課題における中間言語の可変性が生じているということである。2つ目は、中国語話者による同一形式の課題にみられる中間言語の可変性が体系的に生じているということである。

第6章では、中国語話者による日本語従属節の習得に関わる要因について考察した。従来の第2言語習得の研究では、学習者の誤答または誤答生起の要因に対する分析がほとんどである。学習者による第2言語習得の正答と誤答を包括的に取り扱い、その両方の要因を検討するものや、誤答を産出したり正答を産出したりするという中間言語の可変性の生起の要因を検討するものは少ない。そこで、本研究では、中国語話者による日本語従属節の習得において現れた正答、誤答及び正答・誤答間の可変性を多角的に観察し、それぞれの生起の要因を考察した。その結果として、次のようなことがわかった。1つ目は、学習者の正答に関わる要因として、母語の正転移、目標言語の規則に合致する学習ストラテジーの使用、日本語の教育指導や教材からのインプットという3点があげられるということである。2つ目は、学習者の誤答に関わる要因として、過剰般

化，規則制限の無視・規則の不完全な応用，目標言語の規則に適しない学習ストラテジーの使用，日本語教育の中での不十分な指導や教材の不備，不十分なアウトプットという5点があげられるということである。3つ目は，学習者による中間言語の可変性の生起に関わる要因として，調査文の難易度，明示的知識・暗示的知識の運用，文法規則の熟知度，正転移・負転移の同時的作用という4点があげられるということである。

第7章では，中国語話者による日本語従属節の習得にみられる言語転移について考察した。従来の第2言語習得の研究では，正転移と負転移のどちらか一方だけを検討するものが多い。また，わずかながらその両方を考察したものもあるが，項目別で考察しているものがほとんどである。そこで，本研究では，中国語話者による「～とき（に）」節の述語のル形とタ形の習得にみられる言語転移を考察した。その結果として，次のようなことがわかった。つまり，「～とき（に）」節の述語のル形とタ形の習得において，中国語話者は，中国語の正転移と負転移の両方を受けることがあるということである。

第8章では，中国語話者による日本語従属節の習得における教室指導の役割について考察した。従来の第2言語習得の研究では，学習者に対する教室指導の効果の有無について意見が分かれている。そこで，本研究では，中国語話者による日本語従属節の習得における教室指導の役割を考察した。その結果として，次のようなことがわかった。つまり，従属節の中の「は」と「が」，「～とき（に）」節の述語のル形とタ形，「～たら」と「～とき（に）」，「～たら」と「～てから」，「～たら」と「～と」という類義的従属節の節末形式間の使い分けに対して行った教室指導は，いずれも学習者の習熟度を高める効果が確認できたということである。

第9章では，本研究の結論と今後の課題をまとめた。結論は，中国語話者によ

る日本語従属節の習得と中間言語の可変性，中国語話者による日本語従属節の習得に関わる要因，中国語話者による日本語従属節の習得と言語転移，中国語話者による日本語従属節の習得と教室指導という4点に分けてまとめた。また，今後の課題は，母語の異なる日本語学習者による日本語従属節の習得研究，日本語知識の摂取の傾向性と難易度，教室指導の効果の持続性，中国の日本語学習者に必要な教材の開発，日本語従属節の習得にみられる全体的誤りの要因究明という5点に分けてまとめた。

## 審査結果の要旨

別冊論文審査結果のとおり

## 最終試験結果の要旨

公開試問において的確に答え、専門分野での十分な学識を示した。

## 公聴会の日時

平成 17 年(2005 年)2 月 17 日 午後 5 時

## 審査委員会の所見

博士（学術）の学位を授与することを適当と認める。